

# ロンドン・ベルギー視察紀行

国際委員長 浅井 敏博

出発の前日（4月23日）久しぶりに東京にいる子ども達（男2、女1）と会い旅の安全を祈願して酒を飲んだ。グイグイと父親ゆずりの息子の飲み方に、親子のDNAの不思議さを感じる。今回の旅の目的を話すと、すかさず「お父さん英語しゃべれるの」と娘の声。「ウッ」とビールがのどに詰まる。シンガポールのPPCで、度胸だけでスピーチをしてきたが今回は、そうはいくまいと思いつつも「英語が話せなくても国際委員長はできる」といつもの「ハッター」と「小ボラ」がでてしまった。自分にプレッシャーをかけて頑張るタイプであるが、ハイテンションの気分になりいつもより酔うスピードが速い。

昨日の頑張り過ぎが裏目に出て「ボー」とした頭で成田空港のJALのカウンターに着くと、皆もうすでにチェックインをしてそこにいない。見送りに来てくれた協会の職員と同行するもう一人の職員に急がされてチェックインを済ましていざ出発。九州、東北、中国と地方のメンバーが多いが和気あいあいと総勢13名のオールジャパンが日本の空を旅立った。

ロンドンのヒースロー空港に着いたときに盛岡の家を出るときの判断の甘さに気づく。「寒ムー」どこかのテレビのコマーシャルではないが、ロンドンはまだ冬だった。今年は、異常気象で盛岡の桜はとっくに散ってしまい半そでを着ていたためコートを置いてきてしまった。「なんとかなるさ」と言いつつも不安を感じる。ホテルに入り夕食は、近くのレストランでということで、皆で近くのパブをのぞきながらブラブラ歩く。パブでビールを飲んでいるイギリス人は、人なつっこい。「ハロー」と声をかけ

ればみんな同じ。

時差ボケと年のせいかと思いつつ時計を見ると夜中の2時半。目がさめてしまった。「と」思いきや隣のベッドで同室の若い鑑定士は「ガオーガオー」と高いびき。「目を覚まされた」と気づく。これでは、早く寝て熟睡したほうが勝ちと思いなおす。「明日からみておれ」。

初日（25日）は、RICS（王立勅許測量士協会）への公式訪問。ホテルからそんなに遠くないので散歩がてらロンドンのまちを歩く。何年か前にロンドンにきた記憶をたどりながらまちの風景を眺める。思わず美人の通行人に目が行く。しかし、ロンドンには、世界中の国から来訪者が多いのか、いろいろな顔つきや肌の色が異なる人々がいる。向こうもそう思いながらこちらを見ているようで、目が会うと「ニコッ」と微笑む。この「ニコッ」が国際交流の第一歩。

RICSには、約束の時間前に着いてしまったが早く会議室に案内され会議が始まった。今回の訪問の目的は、PM（Project Management）の実態調査と不動産カウンセラーがプロジェクトマネージャーとどう関連付けられるのかの調査だ。RICSは、我々と同じような仕事をしているチャータードサバイヤーの協会である。

最初のレクチャーは、Mr. David Lane, Levell氏で要約すると次ぎのような内容である。

PFIは、保守党によって開発されたが、1992年に労働党が政権を取り現在ではPPP（Private Public Partner）と呼ばれる手法が採用されている。PPPは、広いコンセプトでPFIと多くの共通点がある。



Mr. David Lane, Levellの話を聞く会員

民間のInnovation、Vitalityを活用してVFM (Value For Money) を高めることが必要だ。借り入れのファイナンスの削減、リスクの分散が第一の目的で、次にリスクの補完が大切である。そして、建物のライフサイクルにおけるコスト意識を持ちメンテナンスのしっかりした建物を造る必要がある。また、新しい建物を建てるという考え方だけでなく古い不動産を処分しながら進める。PMの契約は、固定費を意識した契約書を作成すべきだ。リスク分析や規制緩和は、価格に反映する。将来、PPPやPFIへの需要は、増加する傾向にあり、特に地方都市に広がる傾向にある。不動産関連のプロジェクト (Real Estate Partner Project) は、長期間における①Facility Management②Property Managementの分析が特に大切である。PMに対してRICSは、基本的には個人を通しての関与であり協会としての直接の活動はしていない。

次にMr. Brian Thompson氏である。

私は、①政府のPFIのアドバイザー②Consortium (共同企業体) を組んで契約するという両方の立場の経験がある。1992年からPFIで主導的な立場をとってきているが、時の経過で中身が変わってきている。しかし、PPPやPFIのマーケットは、拡大していくものと考えている。Valuation (評価) は、最初の入り口の仕事だ。どの仕事もそうだがPromoterの意向を十分理解する必要がある。まず、第一に行政の要求をクリアーにすることが大事だ。行政は、データや情報の分析、収集の専門性に欠けている。次に不動産の建設入札前の報告書を作成する。そし

て、仕事は、①公共機関へのアドバイス②入札に参加するConsortiumに対するアドバイスがあり、どちらもProfessionalとしてのアドバイスが求められている。また、Equity Financeを得て参加するという立場もある、その時は、入札後のProfessionalとしての関与が必要で不動産に対する関連資料の収集、分析が大切である。

最初から詳細な計画に入るのではなくPortfolio (選集) のように組み合わせて全体像の把握が重要である。行政は、自分の資産がどのような状態になっているのか分かっていない。公共機関が独自の比較できる見積もりを作るときに長い期間の予測をすることは困難な場合が多い。不動産の1年間の予測も困難である。主要な目的は、あまり正確なものでも良い。リスクの分析をして公共機関の発注者がどのように利用して行くのか、ITがどのような影響を与えるのかという程度の目的を考える。最終段階に入り、Property Professional (Facility Management) との交渉において20年間の不動産の管理、運営、修繕等においてその中身を精査して中身を詰めるようにする。この場合に、我々が、どういう段階で、どういう頻度で関わるのかが重要である。開発後、移行リスクのManagementにProfessionalsの関与が引き続き必要になる。

理解しなければならないことは、公共機関はサービスの提供を行い民間コンソーシアムは利益をあげて借入金を返済するのでPartnershipとして求めるものが違うということだ。次に、PPP、PFIが成立して、2~3年後に内容が十分に満たされているかどうかの確認が必要だ。それは、不動産の問題だけ



Mr. Brian Thompsonの講演

ではなくて、Private Public Partnershipの内容がどう変化しているのかに応じて契約内容の変更を速やかに行う必要がある。このための予測が必要になってきている。そして、仕事の内容は、我々がどこに所属しているのかによって役割が違う。

Public adviser, Financial adviser, Facility adviser どの立場でも”安心の確保”が求められている。

続いて、RICSのInternational Operations ManagerであるMr. Shiraz Oshidarさんからチャータードサバイヤーの仕事の内容と資格取得の方法についてのレクチャーがあり質疑応答に入った。



今回大変お世話になったRICSのMr. Shiraz Oshidar

ひとことで言えば、チャータードサバイヤーの仕事は奥が深く、国家資格でないところに「誇り」と仕事の「やり甲斐」を求めていることで、国家試験取得を極上として資格取得後はお上や協会が仕事を何とか回してくれるといった考えなど持ち合わせていないプロフェッショナルの集団である。したがって、インターネットで全世界の会員がカリキュラムを取得することができ協会員であることをツールとしてあらゆる分野の仕事に関わって行くシステムである

という。したがって、会員資格の取得年齢は低く、働き盛りの若者が仕事先への自己アピールの手段であり、関連資料やパートナーのバンク機能を協会に求めている。

RICSとのカリキュラムの相互乗り入れの可能性については否定しないが、根本的な考え方の違いを調整する必要があると感じた。ただ、これからの若い人をカウンセラーとして育てていく上では、有用なシステムであろうと思った。

あまりの熱心さに時間がオーバーし次ぎのロンドン大学バートレット校でのミーティングに間に合わない。大英博物館の入り口の所で、ホットドッグの屋台のおっさんを誰かが見つけた。朝から何も食べていないのもう何でも良い。そう皆が思ったらしく屋台はてんでこ舞い。オールジャパンの紳士どもがホットドッグとコーラで立ち食い昼食である。最初のランチがこれとは…！ なんとも情けなく。なんとなくおかしく、皆で笑いながら立ち食いをした記念日である。

バートレット校には、Peter. W. G Morris, Graham Ive, Graham M. Winchの教授達がまっけてくれ、それぞれの立場でPM（プロジェクト・マネージメント）のレクチャーを受けた。日本でも有名な教授たちですすでに講習を受けておられる方もいると思うが熱心にご指導いただいた。イギリスに本部を置くPM協会（APM）は、世界中で活躍するプロジェクト・マネージャーの広範囲なビジネスに対応できるシステムになっている。しかし、日本の不動産カウンセラーにとっては、不動産プロジェクトや地方都



Dr. Peter. W. G. Moris



Mr. Graham Ive



Professor. Graham. M. Winch

市での中心市街地の再生事業のマネージメントに絞ったほうが良いような気がした。また、Graham M Winch 教授は、建設関連の仕事についてから教授になった方で実務的な話が理解しやすかった。そして、今後のカウンセラー会とのカリキュラムの乗り入れについても可能性を示し、若手の研修の受け入れを含めて協議を継続することに協力する旨の言葉をいただいた。

夜は、Graham M. Winch ご夫妻を交えてレストランで、全員で食事をした。話は、昼のホットドッグランチに華が咲きとにかくきついスケジュールだと意見が一致し明日からのことが心配になった。

二日目は、バーカー&マッケンジー法律事務所へ出向きPMの重要な法律問題についてレクチャーを受けた。



バーカー&マッケンジーの弁護士の方々

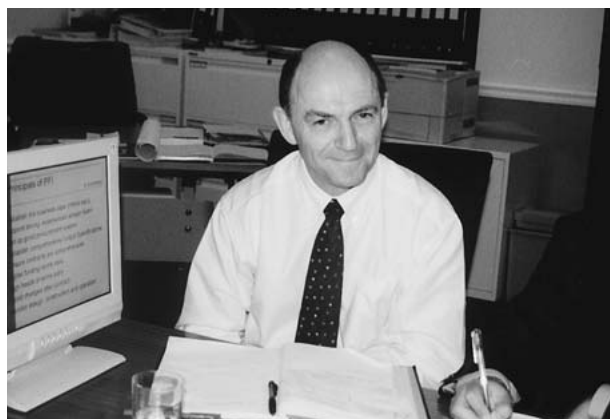
世界の一流といわれている法律事務所のオフィスのすばらしさに驚き、日本人のギーン瑞江（MIZUE GEEN）さんを始め女性のスタッフが多く働いていることに感心した。PFIは、あらゆる出来事を予見しリスクを排除するための法律家の役割が重要であることが強調され、腕の良い弁護士との連携がまず必要であることが実感できた。

午後は、フリーにして各人好きな場所への探索となったが、国際委員長、研修委員長、事務局は、世界中でPFIなど多種多様な仕事をしているコンサル会社であるノースクロフト社への取材である。時差ほげやら二日酔いやらで疲れを感じる。

国際プロジェクト管理およびコスト管理で、世界中で実績を上げている会社のディレクターであるJohn GroundsさんとAlan Garbuttさんに懇切丁寧に説明していただいた。実務的で話しが分かりやすく不動産カウンセラーの仕事进行分类してシステム化することに役立つ話であった。



Mr. Alan Garbutt



Mr. John Grounds

夕方遅くまで時間がかかりとにかく疲れがひどくなってきた。いわゆるバテバテの状態である。皆、無口になってきた。早くビールが飲みたい。夜は、ホテル近くのジャパニーズレストランでくつろぐ。ロンドンの若者の間では、評判の店らしく満員である。創作日本料理に竹筒に入った冷酒が合い、グビグビと酒が進む。今夜は、同室の鑑定士に負けないようなイビキをかいてやる！

今日（27日）は、公式訪問から開放されウェールズのカーディフ市に視察に行く。カーディフは、ウェールズの中心地で古城CARDIFF CASTLE（CASTLE CAERDYDD ウェールズ語）を中心にショッピング街が広がっている。元々は、工業や漁業を中心とした産業であったが、最近では港湾を開発して電子機器などの産業が盛んであるという。ラグビー場が駅近くの港沿いにあり強豪WALES CYMRUチームの本拠地で6万人入るスタジアムは、圧巻だった。本来は、休業日であったがジャパン紳士のギフトショップのすごい買いあさりぶりを見て特別のご配慮となった。スゴイ！



WALES CYMRU4 チームの本拠地スタジアム内部

ところがウェールズは海沿いであるため風が強く薄着の私には絶えられない寒さであった。応援用のバナーを買って襟巻きにした。WALES CYMURのチームカラーは赤であるが、年配の諸氏は、グリーンのが良いということでチーム名も見ずカッコいいなどと言っていたがこれがロンドンのチューブ（地下鉄）で若いお嬢さんたちからの大ブーイングとなることなど知る由もなかった。ロンドンのピカデリーサーカスは、東京で言えば銀座みたいなもの。東京では定宿が銀座なので夜の銀ブラはお手のもの。と、ばかりに裏路地の探検ツアー。ジャパニーズのカラオケバーとおぼしき灯かり。すかさずゴー！酔っ払いながらカラオケを歌っていると銀座と同じ。ここはどこ？勘定見たら銀座以上。ロンドンは何価が高いと実感する。ナルホド。

物価高のロンドンを後にしてユーロスターにてブ

ラッセルへ。今回の一番の期待であったユーロスター。3時間半でブラッセルに着く。ファーストクラスだからビールもワインも飲み放題という触れ込みであったために皆で気合を入れて飲み始めた。最初は、乗客が少なかったために車掌も笑顔でサービスしていたが、こちらの本気ブリに押されて顔色が変わってきた。ドーバー海峡を渡る雰囲気を感じようと意気込んでいたら酔っ払ってふと気がつくとトンネルを抜けていた。あれー！誰かが叫んだが皆もうできあがって大騒ぎ。紳士であることを少し忘れてしまった。しかしこの列車は、出発の時も何の放送もホイッスルもなしにスーと出てきたがまたまたスーと停車しいきなりブラッセルへ。

ヨーロッパは多くの国がそうであるように移民国家である。古くから多くの戦争と領土の分割、併合が国の形式を変え国民のアイデンティティーを形成してきた。そして多くの言葉や文化が入り混じりその地方独特の文化を醸成する。だから、どの町に行っても最初に触れる雰囲気や匂いに敏感になる。そういう意味では、ブラッセルはどこか上品で甘い感じが漂う。歴史を感じるとともに異文化の不調和（というよりはそれぞれの民族の持つ矜持）が良い。ビールがうまい。地元の人々が集まるビアホールで見よう見真似で注文の多いビールを片っ端から片付ける。最近、ドイツの留学生と付き合っているせいかな軽い感じのベルギービールは、グビグビ入る。それもとっておいしい。ホテル近くのグランパレ広場周辺は観光のメッカだ。こぎれいなレストランが軒を連ね、日本人あいてにカモネギ商売をやっている変な目つきの呼びこみのおっちゃんの日本語が怪しい。これがまたよく旅の情緒を掻きたてる。アブネー、アブネーと言いつつ結局ボラれて、不思議と満足して人に自慢する。こんな複雑な人種は日本人より他はいない。

4月29日、ベルギーでの視察の第一歩は、ブラッセルに本拠があるAPMP（ベルギータウンマネジメント協会）でブラッセルのタウンマネジメントについてレクチャーを受けた後、タウンマネージャーの人々に町の案内をしてもらうこととなった。ブ

ラッセルの中心であるグランパレ広場で皆がぶらぶらしていると地元の新聞記者が誰かにインタビューをしていて、「再開発やまちづくりを視察に来ている」というと、「一緒に取材させてくれ」というのでOKしたが、これがたいへん。行く先々で誰彼なく話しかけるものだから記者の頭の中がメチャクチャ。誰かが、「委員長二人が代表して答えろ」ということになりコメントするが、「本当に分かっているのか」と不安がよぎる。



ブラッセル中心部の視察風景

翌日、社会面のトップに大写しの写真が載り我々のことを詳しく書いてあったが、案の定、コメントの一部の名前が逆だった。ともあれフランス語圏最大の部数を誇る地元の新聞社であり、不動産カウンセラーがはじめてヨーロッパに紹介された記念すべき出来事であった。

## Le Soleil-Levant et l'urbanisme

Treize Japonais consultants en urbanisme ont parcouru les artères de la capitale. Une série de rencontres de « co-urbanisme » a été lancée en faveur par des visiteurs impressionnés par les réalisations du Brussels Town Centre Management.

PATRICE LÉPINE

À Japon, c'est différent, le développement urbain est mené sans politique ou stratégie définies. Dans les grandes villes, on construit à l'empirisme, ça importe ou ce commode. Sans occasion mais tout au long, les Japonais écoutent avec enthousiasme les explications de Pierre-Vincent Bollen, le coordinateur du Brussels Town Centre Management. Après la Grand-Place, les spécialistes de l'urbanisme, de passage à Bruxelles pour quelques jours, s'arrêtent devant le Manneken-Pis. Une des légendes dit que c'est ici que l'on trouvait les grands boss dans les rues au Moyen Âge. On utilisait un osselet comme c'était assez cher, on demandait plutôt aux Bruxellois d'uriner.

Le feu éteint, le corrigé s'avance vers le quartier Saint-Jacques. Dans la rue des Grands-Carmes, on ne parle plus de légende mais de réalisation. Ce système de sens unique permet de réduire la circulation, en réduisant le place de la voiture sans toutefois l'interdire.

Vous laissez tout le monde passer ?

interroge un des Japonais.



Treize consultants en urbanisme ont sillonné Bruxelles pour découvrir les techniques de gestion du centre-ville. Photo Dominique Duchesne.

Uniquement la circulation locale, par celle de transit, répond le guide. Comment faites-vous ? Le système est aménagé pour que les voitures passent à leur rythme, c'est impossible à traverser. Née en Wallonie en 1998, l'association du management de centre-ville a pour objectif d'unir efforts publics et privés pour revitaliser l'image d'un quartier. A Bruxelles, Brussels Town Centre Management est l'entité régionale qui coordonne et coordonne les 15 projets en cours. Chaque quartier est représenté par une association qui comprend les commerçants, l'échevin du commerce et différents services communaux, travaux publics, propreté. Nous souhaitons aussi faire participer d'autres acteurs : les habitants, les propriétaires, les gr-

« Des plantes et des fresques pour lutter contre le phénomène des tags »

« Hiroshi Asai consulier au Japon le second au Nous app l'oidé qui moi nos idées, en eux. De la rétro Nord aux usés dans les visiteurs n'a construitre d'un gran mois seport cote de la ges tout à fait ino Toshiko Au



落書き防止のために壁にペイントをした例

ように思える。スラムクリアランスとも言える古くからの街区は、多くの民族の吹き溜まりと化し住環境の劣悪さが多くの犯罪にもつながる。そこで低家賃住宅を再開発事業で進め今までそこに住んでいた人々を中心に居住させ環境整備する。このやり方には、国やEUからも補助金が出るシステムで、移民を定住させる施策をヨーロッパ全体で考えようとしている。一方、これとは逆の考えも急進しヨーロッパの政治の複雑さを感じる。

ブラッセルの町で特に日本に持ち帰りたいシステムがあった。TMO（タウンマネージメント）のシステムであるが、女性を中心としたタウンマネージャーがビルの壁面の活用や緑化によるまちづくりを行っていた。身分は公務員に準ずる待遇でできることから住民を巻き込んでまちを変えて行くスピードには驚いた。どこかの役所のようにすぐやる課などをつくっているが、民間主体のまちづくり集団の実行力にはかなわない。地方の中心市街地の再生には、



アントワープ市役所で Ms. Els van Hoof (Winkelcentra management) の講演

ぜひこの手法の導入を図るべきである。

ブラッセルのほかに海沿いのブルージュは、徹底的な隔離政策で環境を保全し観光都市に特化していた。地方都市においても十分活用できる方式で興味深かった。レースの店やいろいろなレストランに入りたかったが次ぎのアントワープ市への公式訪問が決まっているため残念ながら風のように去って行った。もう一度来ようっと！

アントワープ市役所は、大きな広場に面する宮殿であった。相当な歴史を感じ見事な柱や壁の造りであった。広場の中央に大きな像と噴水があり、ヨーロッパ特有のまちを感じる。議会の会議室で市の職員のレクチャーを受ける。特に女性の進出が目覚しく幹部職員は、女性である。話しに聞くとどうやら細かい行政の仕事は、女性のほうが向くらしい。再開発担当の女性に、「この仕事には、男性はいないのか？」と聞くと、「ちょっと前までいたが能力がないので替えた」と平然とのたまわう。「ゲエッ！」「ヨカッタ。日本にいて。」ふっとひと呼吸して誰かと目を見合わせる。どうもレディーファーストの国は、女性の気ぐらいが普通の男性のものより高く、自信を持って言動しているような気がする。「しょぼくれた日本人のおっさんの顔などしてられない」と気に入った。日本人の集団がまちづくりを視察に来ているのが珍しいのかTVのカメラが入り、研修委員長が代表でインタビューに答えた。真っ黒い顔した九州男児であったため迫力があつたがこれが日本人の代表的な顔だとするには、「ちと誤解を与えたかも知れない」と一人で思った。ごていねいにまちの歴史と再開発の事例を紹介する分厚い本を何冊かいただいた。ありがたくいただいたがこれが、地獄の責め苦になるとは気が付かなかった。

市役所を出ると、現地の案内になった。普通に歩いているのに隊列が乱れる。先頭の職員と我々の距離が離れ、人ごみの中で見失う。「おかしい？」と思っていたら気が付いた。美人の案内のお嬢さんと我々おっさんの足の長さがぜんぜん違う！同じ歩数



チャイナタウンのスラムクリアランスの再開発地区視察

で歩いて行くと自然に離れていってしまう。向こうがそれを気づき時々振り返ってくれる。ヤサシイ。ところがそれだけではなかった。さっきいただいた資料の重みがバッグのベルトを通じて肩に食い込む。「イタイ！」「足もイタイ！」再開発中の駅を見、その、西側のチャイナタウンのスラムクリアランス再開発を見、繁華街の再開発ビルを見る。足が速い。「肩が、足がイタイ！」「もうヤメテ！」。われわれの「心の叫び」など聞こえるはずもない。言葉も通じない。フランス語だもの。美人の職員は、懇切丁寧に説明し元気な日本人の質問に刺激され、さらに熱が入って説明する。「肩が、足がイタイ」

もう何時間歩いているのだろうか？「アントワープはダイヤモンドの産地だ」と誰かが言っていた。「紅いダイヤモンドが見たい」「ビールが飲みたい」隊列が乱れる。後続にいるグループは、もうバテバテ！商店街を通り市役所が見えてきた。もう少しで終わる！急に元気が出てきた。「さー」「頑張ろう。」市役所についたとたんグルリと後ろに回った。「ここからが自慢の低家賃住宅開発ブロックの始まりだ」という。「ウェ！」皆、すっかり気落ちしてうなだれて行進する。市の職員は、遠来の日本人のために張りきって前へ進む。ありがたすぎて涙が出そうだ。「肩が、足がイタイ！」やっと5時近くになって説明が終わりに近づいた。そしたら、私達は、このまま直帰しますので「サヨナラ！」手を振る後姿を見て、「そうか！彼らは勤務時間までわれわれを案内していたことにきがついた」。いま時こんなまじめな職員がいるところなんて珍しい！ありがたくも有り、

そうでない気持ちも有り、複雑な思いでバスに向かった。「疲れた」という実感より「チカレタ！」という語感が頭をよぎった。「ヨーシ！今夜は飲むぞ！」と気合が入ったが。「ところで今回のスケジュールは誰が作った！」という声がどこからか聞こえてきた。同感！

しかし、団塊の世代のおっさん達は、元気だ。昼間あれだけクタクタになっていながら夜になると復活する。軟弱な若者達にとっては、恐るべきジェネレーションだ。ブラッセル最後の夜とあって、皆それぞれに楽しんだ。私は、とうとう一番薄い毛皮のジャケットを買う羽目になってしまった。

今回の視察旅行も終盤に入った。翌朝ブラッセルを出て最終視察地リールへ向かった。今日は、ヨーロッパにとって特別な日だった。5月1日メーデーだ。リールは、もともと工業都市であったがリール駅がロンドン・ブラッセルのユーロスターとパリへ行くTGB（新幹線）の分岐点となってから急速に駅周辺の開発が進み商業、観光都市として生まれ変わりつつある。斬新なデザインのビルや商業施設が建設されホテルやオフィスビルが建築中で、やたらと元気の良さが目だった。ヨーロッパの都市も高速交通時代を迎え、入国に関する手続きも簡略され自由に交流できる。アメリカに対する新しい機軸の息吹を感じる。

リール市役所では、休日にも関わらず職員と女性の助役さんが応対してくれた。午後からメーデーのデモに参加するとのことで普段着のまま会談に入った。一応公式の挨拶を踏まえ質疑形式で進められた。圧巻だったのは、再開発に関する意気込みでとうとうと自信を持って説明してくれた。ここでも感じたが、市長も助役も女性でこんなに元気なまちをついている話しなど日本では聞いた事がない。われわれの感覚がおかしいのだろうか？今ごろ「構造改革！」などとトップが叫んでいる国の異常さと行政や政治に対する市民の感覚の違いに愕然とした。われわれは、もっと多くの国々のまちを見、多くの人々と本音で語り合う必要性を感じた。あっという間に時間が過ぎ彼女は、毅然とした態度でデモに向かった。今回の大統領選挙をヨーロッパの危機と捕らえているようだ。団塊の世代にとっては、このような緊迫感はずくずくとする郷愁を感じ、不思議な血が騒ぐ。その後の結果は、新聞、TV等で報じられたとおりである。

バスでパリに向かう途中デモの情報が入る。中心部は、かなりアブナイということで予定を変えパリ近郊の古城を見て高速でぐるっとパリ市内を遠回りしながらパリの下町モンパルナスのホテルに入った。自分にとってはシャンゼリゼ通りのような華やかなまちよりこの辺の庶民感覚のまちが好きだ。近くに芸術家の友人夫妻も住んでいる。



リール市役所でヒュルツ助役を囲んで意見交換

よくフランス人は、気ぐらいが高く英語を理解できても知らん振りしているなどと言われているが、いまの若者はフランクで愛想が良い。特に「ヤキトリ」と看板に書いてあるレストランは、いわゆるジャパニーズレストランでサーモンの刺身やジャンボヤキトリのセットが比較的安い値段で提供されており、日本語が飛び交う店の雰囲気がとても良い。小さなしゃれたお店に入ると愛想よく応対してくれるし、英語でコ



コミュニケーションを図ろうとする。おもわず日本にいる人のことを思い土産物を買ってしまう。夜は、全員で町の古くからあるレストラン「クーポール」で食事した。多くの芸術家たちに愛されたこのレストランは、とても広く、シーフードもおいしく、今回のツアーで初めてうまいと感じるものがあった。パリは、何度か来ており、来れば必ず行くジャズライブの店がある。夜中にタクシーで駆けつけ御前様。「まあ、いっかあ!」。もう終わりだから楽しもう。

5月3日。パリのシャルルドゴール空港で元気に最後のショッピングをするオールジャパンの姿があった。「気が張っているからなんとか持っているが、家に帰ったら気が緩んでガタガタだろうな」。誰かのつぶやきが聞こえた。

夢は大きく、可能性があることはトライし、世界中の人々とのネットワークを広げることによって、いままで自分一人では実現できなかったことがなんとかできそうな気がしてきた。

